

作成者: 想田 瑞恵

【2010年5月25日(火) 対話についての対話 流れ】

檜垣先生 (以下H) : 西洋思想の授業で「結局先生の誘導があつて対等ではない」という意見が出たんだけど、どう考えればいいんだろう。問題設定はこちらがしているので、何を問題にするかに関しては確かに対等ではないかもしれないが、「こういうことをする」とシラバスを見て合意して来ているはずだし。司会・進行を握っているという点は大きいですが、そこにも介入してもらってもかまわないし。

増田さん (以下M) : 何を問題にするかまで対話で決めていては授業にならないですしね。

想田 (以下S) : 対等でなくしているのは自分なんですよね。自分の意見に対し、他の学生がいくら賛成してくれても、先生が反対したら条件反射的に自分が間違っていると思ってしまう。同じ重さで対等に意見を扱っていないのは、自分のせいなんだと気がつくのに、私は2年近くかかりました。

H : 誘導したのではなく、たまたま教師の意見が真理だったと考えられないかな。自分で考えた結果、教師の意見が真理であることに納得するという形が本来なはず。

S : 自分で考えたのではなく、教師の意見だから正しいと思っているので、誘導に感じてしまうんでしょうね。というかそうでした。

H : 真理が教師の発言中心に導き出されるから対等でないというなら、それは勝敗にこだわってしまっている気がするな。

M : 対話してないですよ。

H : 真理は誰か特定の人の味方ではないはずなんですけど。

佐藤さん : たぶん対話をしない理由には、「間違ったことを言ったら恥ずかしい」というのもありますよね。

S : あります。でも結局その発想がすでに、勝敗にこだわっていたのかも。

H : 「限られた時間の中では全員が発言することはできないから、対等ではない」という反論はどうか。対話に完璧なシチュエーションなんて、常にあるわけがなく、身分が上の人に対話を仕掛けなければいけないときもあると思うんだけど。

S : そもそもそれは反論になっていない気がします。発言している人は、「つまらない」とか「一人で話しすぎ」とか言ってもらえると信じて話し続けるわけで。それが対話のはず。でもそう言うと、「対話と無神経は違う」と返されてしまうんでしょうか。

H : 一応この授業では、どんな意見にも耳を傾けることになっているから。心の中でただ思っているだけというのはよくないよね。

S : というか卑怯ですよ。思い切って言ってしまう。

M : そうだと思いますし、対話をしようとしている人たちには伝わるとは思いますけど、そうでない人にはその言い方でどうかなあ。

S：具体的には、理屈が苦手な人への配慮ということなら、先生がよくする「どう思いますか」という問いかけはやめたほうがいいと思います。新聞記者ってそういう質問は避けるそうです。何を聞いているのか限定されないから。どうと言われても、何をどう思えばいいのか、ポイントはどこなのかわからない。今の文脈で何も自分の中で引っかかるところがなくて、パニックになってしまう。

M：「どう思いますか」のほうが楽なときはありますけどね。知識を問われたときとか。

S：なら、一応それとは区別して、意見を問われるときに限定します。

H：問いを限定しないことのポジティブな意味は、何を言っても良いよってことなんだけどもね。その指摘は納得しました。とりあえず確認の質問を返してくれればいいなあ。一応僕も、対話についての言い方は年々変わってきていて、今は、「あらゆる枠組み・前提を押し付けけない」というふうにしている。枠組みを押し付けられたくないことは、みんな当然のように思っているみたいだから、自分が枠を作って話さないようにしようということ。そして、発言者の前提が納得できないなら問いかけてもよい。発言者は自分の前提が何なのか、言ってみないと気づけないし。

【2010年6月1日(火)対話についての対話 流れ】

S：対話の話の続きをしたいんですが、「途中でというか途中だからこそ、私をさえぎってくれると信じて話を進めますね」という前置きまで用意していたのに、スムーズにこの話が持ちあがってよかったです。前回の件、先生は何を言ってどういう反応が返ってきましたか。

H：大体前回言った通りのことを話したんだけど、かなり対話への理解が深まった気がしている。どうも「合意は自分や他人の感受性をつぶす」という考えがあるみたいなんだよね。

S：内向きのナルシストの考えのような。自分は自分、他人は他人という。

H：それって結局他人を尊重してなくて、いわば無視していると思いませんか。

M：「ソラニン」って映画見たんですけど、バンドをたらたらやってる男に彼女が「人に批判されたくないから一生懸命やらないんだ」と指摘するシーンがあってですね。ああ今の問題をあらわしているなと。「人それぞれ」という言葉で、傷つかないように自分を守っている。

H：合意しても感受性を尊重していることになると思うんだけど。前に「自分の意見が先生の介入により傷つき壊れてしまう」と言う人もいた。

S：確かに壊れるものはある。ただそれは、「ダイヤの原石があると思っていた自分」であり、「自分のみで成立するはずの個性」なんですよ。

H：そういうものが壊れて、他者と関わることによる個性も獲得できる。そのためにも、相手や自分を尊重するからこそ、言葉で違いを表明する必要があるのに。でもそう言うと、

「違いをそっとしておくのが尊重だ」という人も出るのかな。

S：いや、それは違うと強く主張したいですね。たとえば私は、相手に不快な思いをさせられたとき、それを指摘するのではなく、心のスタンプカードにスタンプを押します。そしてそれが満タンになるとキレてしまう。でも相手にしてみれば、何が私にとって不快だったのかわからないので、「何コイツいきなり」ということになってしまう。自分の不快に思った気持ち（相手との差異）をそっとしておく・触れないでおくというのは、自分を尊重していることにすらならないです。

H：でも、家族や恋人や親戚みたいに、一緒にいることが大前提なら、スタンプカードも有効なんじゃない？少し前の共同体ではきちんと機能していたわけだし。もちろんキレるのではなく、不満を小出しにすればだけど。ひとつの戦略だよね、相手の嫌な面を見ないようにするの。ただそうなると対話はできない。対話はやっぱり対決だし、そうなったとき、相手から離れることを選ぶこともある。相手の消去という意味での離れるじゃなくてね。問題は、クラスメイトみたいな、そういう前提のない、一時の関係の場合。スタンプカードが満タンになればいとも簡単に切ってしまう関係において、スタンプカードは意味があるのか。そうやって気を使い、思いやる関係に意味はあるのかな。たとえば、非常勤先の先生が、「盗難にあった生徒がまず真っ先に疑ったのが、ご飯を食べるのもトイレに行くのも一緒だった友人なんだよね。しかもまず直接学校に訴えて、『法で罰してください』と言うんだよ。何なんだろう」と話していた。

佐藤さん：前に友人が冷たくなって私が理由を尋ねたのに、「なんでもない」と言うんですよ。それでも私は相手の話を聞けたけれど、その子は、相手に確かめるという発想がまずない気がしますね。

H：そこまでして一緒にいたいのかな。ご飯を食べる相手が必要なんですかね。

S：たぶん一緒にいる相手がほしいわけじゃなくて。それは誰が相手でもよくて、ほしいというより必要という感じなのでは。さっき出た、自分の内なる個性・ダイヤの原石を抛り所にしているから、自分に対する肯定感が薄い。だから自分を肯定してくれる人を常に求めなくてははいけない。

佐藤さん：でも全肯定されたらかえって怖くない？

S：否定でもいいと思う。ツッコミとか天然ボケとか、そういうキャラだから仕方ないと思われれば良いわけで。私のキャラを肯定してくれて居場所ができればいい。だから、私を肯定してくれる限りにおいて、自分は自分であなたはあなた。肯定してくれなくなったら、関係を切ってしまえば良い。

H：自己破滅的だな。それって肯定っていえるのかな。

S：確かに、肯定にも種類がありますね。というか私現代の若者代表ですか。

佐藤さん：カウンセリングみたいだよ。

永延さん：中学・高校と、けんかもして親しかった友達とは今でもやり取りするけど、そうでない人とはいわば関係を切ってしまっている。それとは違うの？

S：違うと思います。単なるクラスメイトという関係は、親戚付き合いと同じで、その学年の間は一緒にいなければいけないという前提がある。そうではなくて、切ったとしてもいくらでも再生産できるという関係。

佐藤さん：わかるかも。

H：でもねえ。自分を肯定してくれないなら関係を切ってしまえって、何様のつもりだっと思うけど。自分を肯定してほしいなら、殴られても罵られても、その関係を切っちゃいけないでしょう。

S：まあ、そうなんですけどね。

M：そうなんですけど、としか言えないですね。

H：そういうコミュニケーションがいかにも不毛でむなしいか、どうしたらわかるかな。

S：でもいきなりそう言われても、「先生はわかってない」と思ってしまう。だって私に他に選択肢はなくて、そうするしかなかったのですから。

H：そこで、選択肢がないって思っちゃうのがなあ。そんなことないでしょ。

S：授業で示された対話というものと、自分のコミュニケーション方法は違うようだと、気がつけばいいんでしょうけど。

H：本当に自分や相手を大事にすること、自分をちゃんと認めてもらうことって、その人がその人なりに考えていると認めることで。そしてそれは意見を収斂できないことから知るしかないと思います。

M：大事にするの意味が違うのかも。教室に集まった粒々をそのままにしておくことが大事にすることだと思って、他者と関わらずにますます小さくなってしまうのかも。

H：ああなるほど。そうすると「対話は勝ち負けじゃない」と言うだけでは、「そんなの私たちのコミュニケーション方法のほうがよくわかってる」って返されちゃうのか。

M：ですね。そして「対等」の意味も、「人それぞれ」になってしまう。

H：なんかねえ。みんな自分の世界の王様や女王様なんだね。人間関係をそういう形でやるなら、僕の授業なんて論外だと思うし。「理屈がきっちりしすぎて遊びがなくて辛い」という意見が出ることもあるけど、それもなんか違う気がするし。テキストを読み進めていく授業形式ならまた違うんだろうけど。来年、必修の哲学通論どうするかなあ。五十嵐先生の授業はうまくいってると聞きましたが、どうですか。

M：どうなんだろう。印象としては流されていく感じが強いです。テキストにうまくひっかかるところがつかめない。質問や意見は確かにたくさん出ますけど。

H：彼女、たしか前の大学でベストティーチャーに選ばれてましたよね。

M：そうなんです。五十嵐先生は、まず自分を「友達だと思ってください」と言って、授業はみんなあだ名や呼び捨てで進んで、敬語も禁止なんですよね。使ったら注意されるくらいに。

H：呼び方の工夫はカント研究会などでもやってますね。「先生」と呼ぶのを禁止にしています。言い方ってやっぱり関係を表してしまうから。ただ、「あからさまに身分が違うのに」

と抵抗を感じる人もいるみたいだね。

S：その方の気持ちわかります。だって、英会話教室とかで「あなたはこれからオーディリーね、アンね」というのと同レベルな気がしてしまいますもの。呼び方に影響されやすいってのはわかるんですけどね。ただ、意見や質問を言えるのってある種の信頼感があるってことですよね。私の言ったことがつまらなかったり間違ったりしていたら、心の中で断じたりせずに指摘してくれるだろうという。相手の心のことなんて気にするに値しないとも思いますけど、なかなかそこまで悟れないですし。とにかく、今のお話を聞いた限りでは、五十嵐先生の授業では、そういう「友達と思って」という前提を作って、擬似的な信頼感を作り上げている気がしました。

M：別に授業が上手く進むなら擬似的でもいいんですよ。ただ、五十嵐先生が「院の授業はあまり上手くいってないほうで、学群の授業のほうが終わったあともわいわいやっている」と言っていたのが気になる。ただ楽しくわいわいだと大丈夫なのかなと。

H：確かに気になりますね。じゃあ、自分と相手の違いを見つめてかつ、そういう雰囲気もよくなる上手いやり方があったら、また教えてください。

【5/25, 6/1対話についての対話 まとめ】

・「何様のつもりだ」という指摘があった。思うに、私は法であり裁判官である。法とは自分の気持ちであるため、「自分の気持ち至上主義者」であるといってもよい。私の気持ちを害することはルール違反であり、すなわち罪なのだ。ゆえに、友人が盗難したから法で罰してくれと言うのは、別に飛躍ではない。一緒にいた友人であればこそ、「私の気持ちを害さない」というルールを破り、「裏切った」罪は大きい。さらに妄想をたくましくすれば、「私の気持ちを害した」奴なら、盗難をしても不思議はないという発想が見てとれる。

・「自分の気持ち至上主義者」の自己肯定は、その都度その場面の空気や気持ちに沿って行われる。つまり、自分とは、内発的衝動や欲求に基づいているため、きわめて不安定なものである。こうした自己肯定の仕方ではやがて行き詰る。かつ「本当の自分」への期待値が高いため、自己肯定感はより薄くなる。

・サンデルの授業について檜垣先生が、「筑波の学生さんは、こういう風に当たり前の意見を言わないで、あえて奇抜なことを言おうとするよね」と話していたこと。また、「人に、よく変わっていると言われます」と自己紹介する若者たち。どちらも身に覚えがある私としては、これらも「本当の自分」思考に根ざしている気がしてしまう。つまり、「本当の（純粋な）自分は、『普通（他の人）』と違うはずなのだから、変わっていると演出しなければいけない」という考えが見え隠れしているようなのだ。この発想は、視点がとても内向きで、誰もが違うことを感じ考えているはずだ、というところにまで思いがいたらない。

・加えて、「本当の自分」思考は、それを支える人間関係を必要とする。しかし、異質な他者は自分の純粋さを阻害するものでしかないため、キャラが必要になる。

- ・キャラ設定とは、異質な他者へのいわばラベル貼りで、そうすることで、異質なものと対面する負荷を下げることができる。それでも対応できなくなれば、いわば相手を異物とみなし関係を絶ってしまう。それが、「自分は自分、他人は他人」の行き着くところである。
- ・空気を正しく読み、自分のキャラに合った言動を常にしなくてはならないなら、自然、外キャラは演技となり、内なる純粋な自分、すなわち本当の自分に救いを求めるしかない。そしてますます思いと言葉は一致しなくなっていく。この悪循環をどうすればよいのか。
- ・対話により、自分の内容や個性だと思っていたものやキャラが否定されても、居場所がまだあると知ることができる。「こういうキャラだから」「こういうことが言えるから」居場所があるのではないという、無条件の自己肯定感を得るには、対話しかないと思う。
- ・ただ、対話における「相手が思っていることなんて聞かなければわからない」や「自分の思っていることがどう思われるかなんて、言ってみなければわからない」のような、ある意味気楽な態度は、相手の気持ちに無神経であり、相手の言葉をつぶすものとならないか。「言わない・言えないあなたが悪い。それは同意である」が基本姿勢でも、「言わない・言えないあなた」の切捨てにならないように気をつけねばならないだろうと思う。だがそれは、人の心の中を気にして、なるべく人を傷つけない、ひいては傷つきたくないと思う気持ちと同じだろうか。

参考：土井隆義『友だち地獄―「空気を読む」世代のサバイバル』（ちくま新書）、『キャラ化する／される子どもたち―排除型社会における新たな人間像』（岩波ブックレット）